聖地長沼を沸かせた
佐沼高ボート部クルーたち
（氏名・学年・種目）

Otsuki Norika
大槻のりか（３年）
クォドルプル

Sato Kei
佐藤慧（３年・主将）
クォドルプル

Takahashi Miu
高橋未羽（３年）
ダブルスカル

Sato Itsuki
佐藤樹（３年）
クォドルプル

Kikuchi Ami
菊地亜美（３年）
クォドルプル

Sato Tao
佐藤太生（３年）
クォドルプル

Sato Shiori
佐藤史織（３年）
クォドルプル

Nagaura Hibiki
永浦響（３年）
クォドルプル

Abe Natsumi
阿部なつみ（２年）
クォドルプル

Abe Yuya
阿部裕也（３年）
クォドルプル

Kasahara Rina
笠原里那（２年）
クォドルプル

Fujiwara Saki
富士原彩希（２年）
ダブルスカル

Yusa Ken
遊佐健
ボート部部長

Mitsuduka Yoshihisa
三塚芳久
ボート部監督

❶初のインターハイで５位入賞を果たした男子舵手つきクォドルプル❷過去最高タイムをマークした女子舵手つきクォドルプル❸「最高のペアでした」とお互いを評する女子ダブルスカル❹佐沼高ボート部員全員で記念撮影。忘れられないインターハイとなった❺準々決勝後、抱き合い涙を流す富士原（左）と高橋（右）❻レース前、監督、部員が一体となり士気を高める

熱い夏過ごした佐高クルー
聖地長沼で躍動する

男子舵手つきクォドルプルの５位入賞など、地元開催という重圧をはねのけ、見事な成績を残した佐高ボート部。佐高ボート部の熱くて濃密な４日間を追った。

地元でのインターハイ 全てを出し尽くす

開会式後のインタビューで「男子は地元優勝が目標」と佐藤主将が、「女子は、両種目で上位入賞を目指す」と大槻が力強く答えた。大口ではなく、そのための準備はできているという自信にあふれていた。

佐高クルーは、大会２週間前に１週間の強化合宿を実施。持久力強化に向け、毎日40キロをこいだ。朝から夕方までひたすらこぐ１週間。これが、選手たちの大きな自信につながった。

女子クォドルプルは、予選、敗者復活戦を経て、準々決勝に進出した。大会直前にこぎ順を変更し、予選後に戻すという荒療治もあった。全ては「上位入賞」のため。迎えた準々決勝、常には、５００メートル付近でペースダウンするが、残り２５０メートルから再スパート。過去最高の３分45秒90をマークするも、５着に終わる。

女子ダブルの髙橋、富士原は初のインターハイ。ダブルは人数が少ない分、一つのミスがタイムに直結。２人の技量と呼吸を、しっかり合わせることがかぎになる。準々決勝、三塚監督は「ボート人生かけてこい」のげきに２人はうなづいた。げきに応え、息と気持ちを合わせ、最初から全開。５００メートル付近まで、トップをマークしていたが、ペースアップについていけず５着に。女子の夏は準々決勝で終わった。

男子は、今年１月クォドルプルでのインターハイ挑戦を決めた。「全員の力で優勝する」。それからの半年は、優勝に向けて練習の日々。始業前、午前５時からの朝練習は当たり前だった。県総体で優勝し、インターハイを決めた。意外にも男子メンバーも、初めてのインターハイだった。

迎えた本番「地元開催の重圧は想像以上」だった。楽なレースは一つもなかった。そのような中、気持ちを切らさず決勝に駒を進めた。決勝は、前半５００メートルを４位で通過。最後に追い込みをかけたが及ばず、５位で大会を終えた。

佐沼高３年生クルーの目に涙はなかった。勝てない悔しさはあったが「全て出し尽くしました。最高のインターハイでした」と笑顔を見せた。

「少ない部員で、よくここまで頑張ってくれた。生徒は登米市の誇り」と三塚監督は生徒たちをねぎらった。

今大会は大きなトラブルもなく、手前みそになりますが、本当に充実した内容だと思っています。これには、大きく三つの要因が上げられます。

一つ目は、天候に恵まれたこと。期間中の気温が、26、27度で推移し、暑過ぎず、ちょうど良い環境でした。

二つ目は、高体連、ボート協会や行政など関係機関との連携や事前の準備がうまくいき、万全な運営体制だったこと。結果として、競技の進行を一切変更することなく、閉会を迎えることができました。

最後に三つ目は、地域からの支援。地域の自主的な地域清掃や北方小のアンケート調査協力など、本当にありがたいものでした。また、地元の３校から約５００人の生徒が、運営スタッフとして協力してくれました。高校生の祭典を、高校生が支えた非常に意義のある大会でした。協力、支援いただいた全ての皆さんに感謝しています。

オールをこいで、進むボート競技。今大会の成功は、まさに「オール登米市」の力があったからこそ。登米市がボートの「聖地」になることを期待しています。

「オール登米市」の取り組みが「聖地」につながる

Murata Kiyoaki

南東北インターハイ
ボート競技
村田清晃競漕副委員長